

## メキシコの看護教育における社会奉仕実習

### メキシコにおける新型インフルエンザの脅威

「メキシコで豚インフルエンザ流行のきざし」というニュースがわが国に流れ出したのは、大型連休を控えた4月の末だった。メキシコ市周辺の知人らによれば、医療機関は発熱や感染の疑いのある来院者の対応に追われ、教育機関は休校の措置がとられたところだった。この新型インフルエンザの発現の脅威はメキシコ経済への大打撃となり、国を超えた全世界的な保健医療問題として一大センセーションを巻き起こした。

### 実習での感染症の予防活動

この一連のインフルエンザ騒ぎで思い起こされたのが、実習生らがチアパス州で取り組んでいた呼吸器感染症の予防活動である。州内でも特に先住民の多い山岳地域に派遣された実習生らは、寒暖の差が大きいこの地域には呼吸器感染症が多い。特に乳幼児の場合には重篤な肺炎に移行しやすいため、ちょっとした感冒症状でも早期に受診し、栄養を摂り、保温に努めるよう住民に指導していた。また、窓の小さい狭い同じ室内で薪や枯れ枝を燃やす炊事と寝起きを共にしたり、朝の寒冷な時間に子どもに水浴びをさせる習慣の改善、家畜と居住空間を隔離すること、うがいや手洗いの必要性も説明していた。しかし、実際の住民は清潔な水源やトイレさえも持たない暮らしをしていた。実習生らにはこれらが現地の保健医療の改善を阻んでいることは容易に理解できた。しかし、なぜこのような生活が続き、どんな戦略が必要なのかはまったく見出せないのであった。

### 農村地方の生活に関わる実習生の教育支援

この地域のある職業訓練施設には家畜の飼育演習室があり、人員がいない週末は施設の安全衛生管理を担当する実習生が駆り出された。施設代表者である獣医が次々と生まれ出る子豚や血液を素手で扱う様子に、実習生らは密かに顔をしかめていた。管理上の指導に現地の限られた資源や経済状態を考慮するのは言うまでもない。しかし、施設の権限を掌握し専門知識を持つ獣医にさえ「手袋」を勧めることができなかったのはなぜだったのか。「就業する直前に臨地で実際の就業経験が積める機会」と意気込んでいた実習生たちはいつしか、簡単には習慣を変えない現地の風土や都会とはあまりに異なった条件を知るにつれ、慎重に言葉や態度を選ぶようになっていた。「自分たちが学んできた専門的な知識や技術を提供しようにも、自分たちが現地に受け入れられなければ何もできない」。彼らに必要な言葉をのみこませてしまう前に、まず見知らぬ土地で試行錯誤する実習生らの立場を理解し、現地に受け入れられる方法を共に考えられる存在がいたら……。新種のウイルスの脅威を水際で防ぐと同時に、保健衛生の生き届かない農村地方の衛生環境の改善やそれに関わる実習生の教育支援を見直すことで可能になる対策もあるのではないのか。のみこんだ言葉を最後まで発せなかった元実習生が今、メキシコで何を考えるのか、是非聞いてみたいと思っている。



窓の小さな狭い部屋で、藁や枯れ枝を燃やす炊事と寝起きを一緒にしている